

緒立 A 遺跡確認調査報告書

1993.3

黒崎町教育委員会

例 言

1. 本書は、新潟県西蒲原郡黒埼町大字黒鳥字川根湯5996番地他に所在する緒立 A 遺跡の確認調査の記録である。
2. 調査は緒立八幡宮管理者の黒鳥地区(代表 那須野惣八)による境内整備に伴う確認調査として、国および県の補助を受けて実施した。
3. 調査は黒埼町教育委員会が主体となり、平成4年5月18日～5月30日に実施した。調査体制は本書末尾に記した。
4. 本書の執筆・編集は調査担当が、すべて行った。
5. 調査から報告書作成まで諸氏・諸機関から協力を賜った。

目 次

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の環境と概要	2
III	調査の概要	3
	1. 調査の目的と方法	3
	2. 調査の経過	3
IV	層 序	4
V	遺構と遺物	7
	1. 遺構と一括出土遺物	7
	2. 縄文土器	9
	3. 古式土師器	12
	4. 須 恵 器	12
	5. 土 師 器	12
	6. その他の出土遺物	13
VI	ま と め	14

挿 図 目 次

第1図	周辺の地形	1
第2図	遺跡周辺図	2
第3図	昭和56年の調査	3
第4図	調査風景	3
第5図	トレンチ設定図(1/1,000)	4
第6図	層序	5
第7図	2 T 土層断面図(1/60)	7
第8図	2 T 一括土器出土状況(1/20)	7
第9図	2 T 一括土器実測図(1/3)	8
第10図	縄文土器実測図(1/3)	9
第11図	遺物実測図(1/3)	10
第12図	遺物実測図(1/3)	11
第13図	石製品・土製品実測図(1/2)	13

図 版 目 次

図版 1	昭和20年代の遺跡周辺 (建設省国土地理院保有写真)
	昭和50年代後半の遺跡周辺 (緒立土地区画整理組合資料)
図版 2	遺跡遠景(北東より) 遺跡近景 2 T 土器出土状況
図版 3	3 T 5 T 10 T
図版 4	縄文土器(1:3) 2 T 一括出土土器(1:3)
図版 5	古式土師器(1:3) 須恵器(1:3)
図版 6	土師器(1:3) その他の遺物(1:2)

I 調査に至る経緯

緒立 A 遺跡(以下、「緒立 A」と略す)は緒立八幡宮境内のほぼ全域を範囲とし、緒立八幡神社遺跡ともよばれる。隣接する流通センターの発展により周辺の景観が大きく変わるなかで、この緒立八幡宮だけが昔の面影をとどめている。現在は地元(黒鳥地区)が管理し、季節になると祭などの行事が行われている。

緒立八幡宮の境内は社殿・本殿付近を頂部とするマウンド状になっており、裾部との標高差は場所によって 2 m 近くある。近年、この斜面から裾部にかけて土砂が著しく流失し、また敷地内の構築物の傷みも目立ってきて、地元ではこれらを修復・整備しようという声があがっていた。具体的には、鳥居前の石組の組替えや遊歩道の設置という内容であったが、本地点が昭和 27 年発見以来、県を代表する遺跡であるということでその取扱いが心配された。平成 4 年 4 月黒埼町教育委員会(以下、「黒教委」とよぶ)は、黒鳥地区総代の那須野氏から連絡を受け、県教育委員会と協議にはいる。協議では、工事は遺跡に影響を及ぼすものではないが、今後も部分的な工事が予想されるとして、遺跡範囲が不明な地点について確認調査が必要であろうという結論に至った。黒教委はこの旨を那須野氏に伝え、所定の手続きをおえた後確認調査を開始した。調査は、工事を 6・7 月中に実施したいとの黒鳥地区の意向により、同年 5 月 18 日～5 月 31 日の予定で実施した。



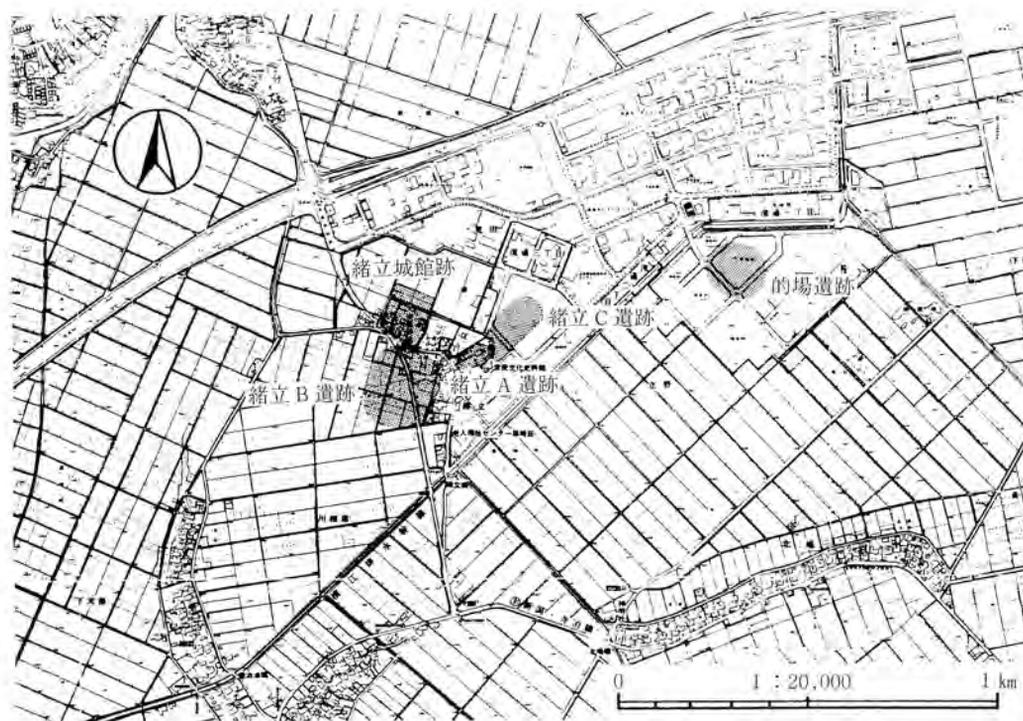
第 1 図 周辺の地形

II 遺跡の環境と概要

緒立遺跡が存在する黒埼町大字黒鳥字川根湯付近は、海拔0 mあるいはマイナス地帯の沖積地であり、集落は自然堤防上などの微高地に営まれている。昭和40年代初めまでは、湯や湿地が点在し「低湿地農業」が行われていたが、現在は土地改良により蒲原平野を代表する穀倉地帯のひとつとなっている。

緒立遺跡は、埋没砂丘上に立地している。この砂丘は北東—南西方向に延びる列状となっており、海岸線にはほぼ平行に走る。起伏をもつが、遺跡は比較的標高が高く安定したところで展開している。緒立遺跡は砂丘列上に緒立 A を中心として、南西には緒立 B が、北東には緒立 C が広がっている。全体の範囲は20,000㎡以上に及ぶと推定される。どの地点でも縄文時代晚期—奈良平安時代の遺物がみられるが、特に注目されるのは緒立 A の葺石をもつ円墳、緒立 B の縄文時代晚期—弥生時代の葬制に関わる遺構と遺物、緒立 C の中央政治との関連性を想定させる遺構と遺物である。地点によって各時代のあり方は異なるが、全時代を通じて重要な情報を提供する遺跡である。

緒立遺跡の800 m北東には、奈良—平安時代の物資管理・流通の公的拠点という性格をもった漁撈性集落とされる新潟市の場遺跡があり、緒立遺跡との関連性がおおいに注目されている。



第2図 遺跡周辺図(黒埼町編 1:10,000の地図を使用)

III 調査の概要

1. 調査の目的と方法

今回の調査は遺跡の範囲確認が目的であり、過去に行われた調査地点(昭和50年に社務所建設地——包含層確認、昭和56年に墳丘部分にあたる社殿・本殿付近——葺石検出)以外の不明な部分が対象地である。それは社殿・本殿の前方と斜面から裾部にかけての範囲であるが、境内には構築物(碑・建物)や樹木などがあり、トレンチ設定は限られた地点で行われた。掘削はかなりの盛土が予想されたため、その除去にバックホーを活用し、包含層に近くなったところで人力に切り換えることにした。包含層が確認された場合はさらに50cmほどの幅で溝を掘り、地山の検出を行っている(掘削が深く危険を伴う場合はその時点で止めている)。土層図はトレンチ長辺のうち良好な面で測り、1/20で作成した。



第3図 昭和56年の調査

2. 調査の経過

調査は平成4年5月18日から5月30日まで実施した。予想外に樹木の根がはっており、そのため進行が遅れることもしばしばであった。まず拝殿前方階段下の工事予定地付近に2カ所のトレンチ(1T・2T)をいれる。バックホーが入らないため、最初の表土除去から人力による作業となる。1Tでは昭和に入ってからのもので攪乱で包含層は確認されなかったが、2Tでは地表面から50cm前後の深さで確認され、さらに竪穴住居の一部も検出された。この後は拝殿の前方すぐのところから南側斜面にかけて、2本ずつくらいのペースでトレンチを設定していく。3T以降については、地元の人から時代の新しい盛土が厚く堆積しているということを知り、表土や盛土をバックホーで除去することになる。3T～10Tのすべてから包含層が検出され、タバコ3箱ほどの遺物が出土した。また葺石部分に近いトレンチでは、流出したものがみられた。



第4図 調査風景

IV 層 序

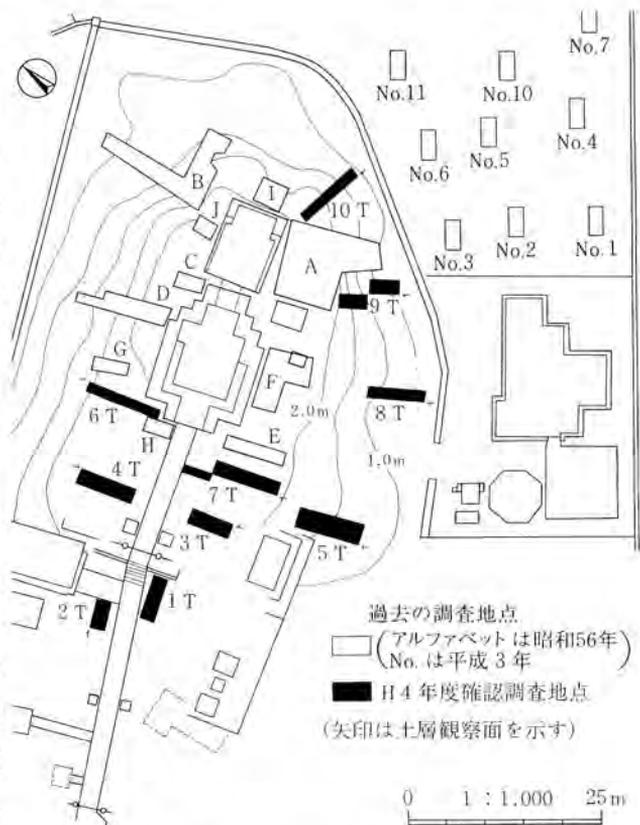
本地点の層序は、大まかに地山直上の包含層とその上にみられる2～3種の堆積層から成っている。この2～3種の堆積層は基本的には古代以降の自然堆積層や盛土であるが、近代以降の盛土が大半を占めているようである。明治5年緒立八幡宮本殿が建てられる際に、地形がため(基礎地盤づくり)が行われたことをうかがわせる資料があり、この土木工事の痕跡が近代以降の層序でみられるかもしれない。包含層は黒褐色(砂質土)を基調とし、縄文時代晩期・古墳時代前期・奈良～平安時代の遺物が出土している。包含層の厚さは地点によってかなりバラツキがあり、厚いところで1m近く、薄いところで20～30cmとなっている。遺物は包含層下半部に集中する傾向があり、やはり厚いところに多く出土するようである。10本のトレンチのうち、1T(「第1トレンチ」の略。以下、トレンチ名略す)以外のすべてのトレンチで包含層が確認されている。包含層における時期的な分層はできなかったが、後述する2Tについてはその可能性もみられた。以下、各トレンチについて述べる(第6図)。

3T・4T

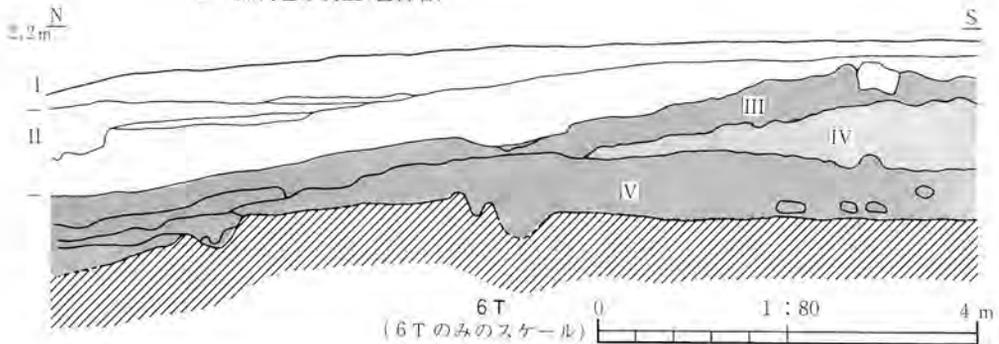
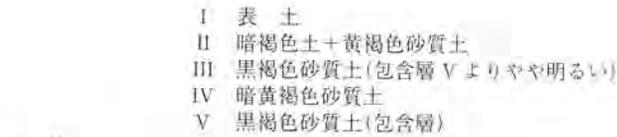
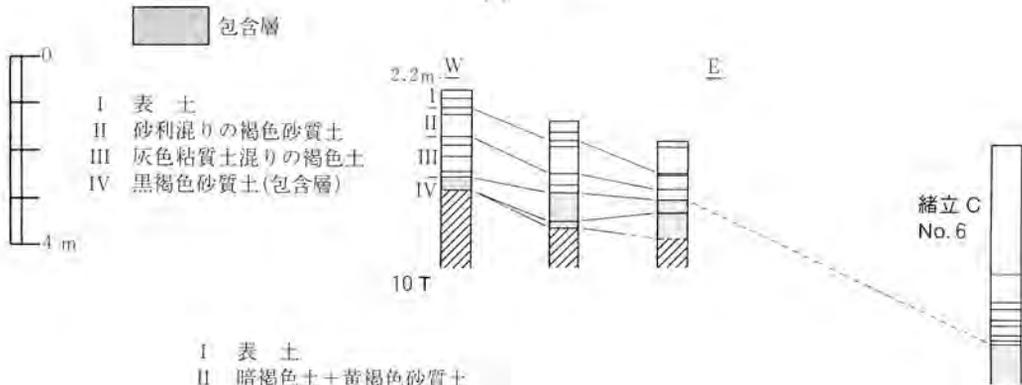
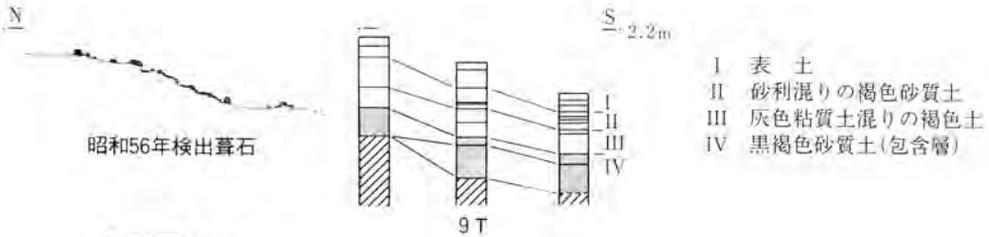
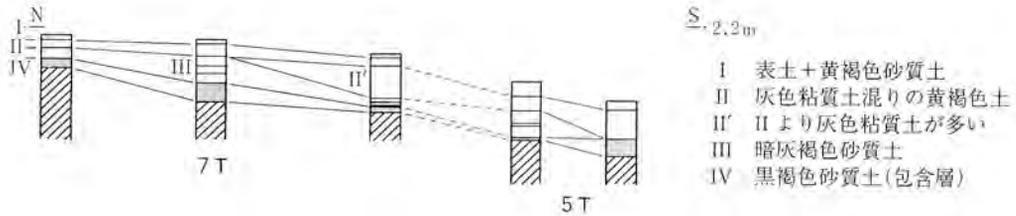
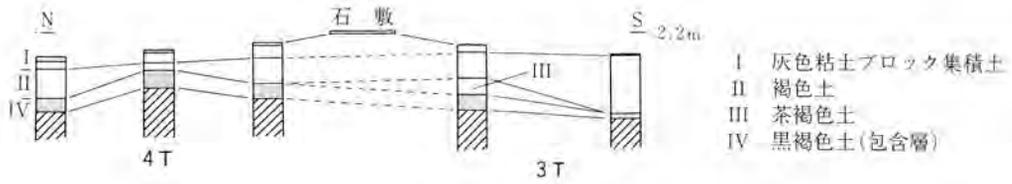
石敷きを挟んで一線上になるように設定したトレンチである。層序は同じような堆積状況で、包含層より上の層は近代以降の盛土である。地元の人の話では、Iは昭和後半の盛土・整地層ということである。一部時期不明な堆積層(III)がある。包含層からの出土遺物は古式土師器の破片が各1/5箱と須恵器・土師器が数点である。

5T・7T

5T・7Tは一線上からややはずれるが、位置的にはあまり問題ないと考え、両者を通して扱った。Iはやはり昭和後半の盛土・整地層と思われる。IIは近代以降の盛土で、灰色粘質土の量によりII・II'に分かれる。IIIは包含層を切り込んだ落



第5図 トレンチ設定図(1/1,000)



第6図 層 序

ちこみである。溝かもしれないが、時期は不明である。7 Tからは1/4箱ほどの古式土師器とともに十数点の須恵器・土師器が、また5 Tでは数点の古式土師器が出土している。

9 T

昭和56年調査のAトレンチに隣接して設定したものである。Aトレンチでは良好な状況で葺石が検出されているが、墳丘をはずれた9 Tでは、包含層中に3～4個の流出した葺石がみられただけである。I・IIは近代以降の盛土、IIIは古代以降(近代前)の自然堆積土あるいは盛土である。包含層は2層に分かれるところがあるが、それは色調・混合土によるものであり時期によるものではない。この包含層からは古式土師器が1/5箱、須恵器・土師器が10点近く出土している。第6図にあるものは、以前に検出された葺石(Aトレンチ)のエレベーションと9 Tの土層断面図を通しでみたものである。葺石の存在する層ははっきりしないが、9 T包含層と地山の間に存在するような層があり、墳丘を構成しているのかもしれない。神社排水溝近くは地山がかなり深いところにあり、湧水のため検出ができなかった。

10 T

9 Tの北側に15m離れて設定したものである。土層は9 Tと同じような層序を示しており、I・IIが近代以降、IIIは古代以降(近代前)に比定されるものである。トレンチは回周する葺石の範囲からはずれているが、本殿に近い方でその流出したものが15個ほどみられた。層位的には包含層直上で確認される。遺物は、須恵器・土師器が10点前後、古式土師器が1/5箱、包含層下半部から出土する。このトレンチの延長上10m離れた地点には、平成3年に実施された確認調査のNo.6トレンチがあり、包含層が確認されている。この方向でやや傾斜度を増しながら低くなっていく状況がみられる。

6 T

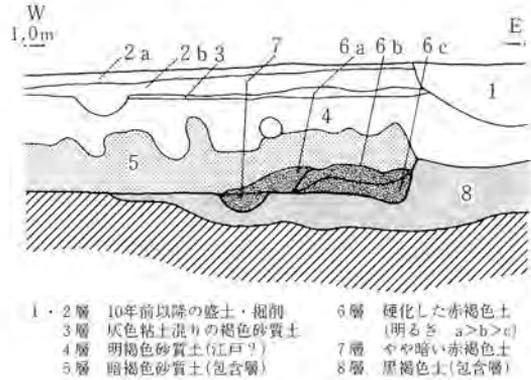
拝殿に向かって正面左脇に設定したトレンチ。ここは、昭和56年調査のGトレンチとHトレンチの間となる位置である。Gトレンチでは葺石の端部が検出されている。本トレンチは位置的には、墳丘に近い地点であり、他トレンチの層序とのつながりから地山の標高を0.5m以上と予想していたが、検出された標高は0m前後であった。なぜかこの部分だけが深くなっている。当初、墳丘の築造に関わって深く掘削された地点とも思われたが、地山直上の包含層(V)下部からは流出した葺石・古式土師器・須恵器・土師器と一緒に出土しており、時期的にはその可能性がないことになる。層序は、近世以降の盛土のI・IIと奈良～平安時代のIII～Vで構成される。このなかでIVは一応包含層として取り扱ったが、IIIやVよりはしまりがあり色調もやや明るい。ほぼ水平の地山はトレンチの北端から外側へ向かって、急激に落ちていくようである。遺物は古式土師器が1/4箱、須恵器・土師器が1/2箱出土しているが、Vからの出土が半分以上を占める。IVからの出土はほとんどない。珍しいものとしては、瓦塔片がIIから出土している。

V 遺構と遺物

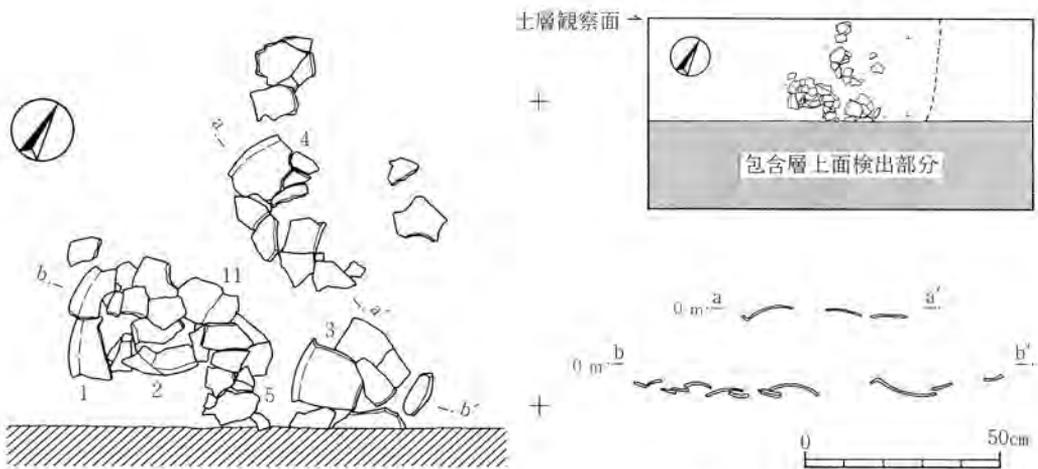
1. 遺構と一括出土遺物

10本のトレンチのうち遺構が確認されたのは2Tだけである。竪穴住居と思われる掘り込みが断面でみられ、1m幅で溝を掘り下げたところでは遺物がまとまって出土した。ほとんどが土師器小甕であり、遺存率は良い。これらは赤褐色砂質土がやや硬化した部分から出土しており、第7図の6層にあたる。この6層は被熱している可能性があり、カマドと考えられる。7層部分は付属施設のピットであろう。同図中の太線で示してあるのが竪穴住居の断面プランである。平面プランは明確ではないが、確認できた(第8図右上)。

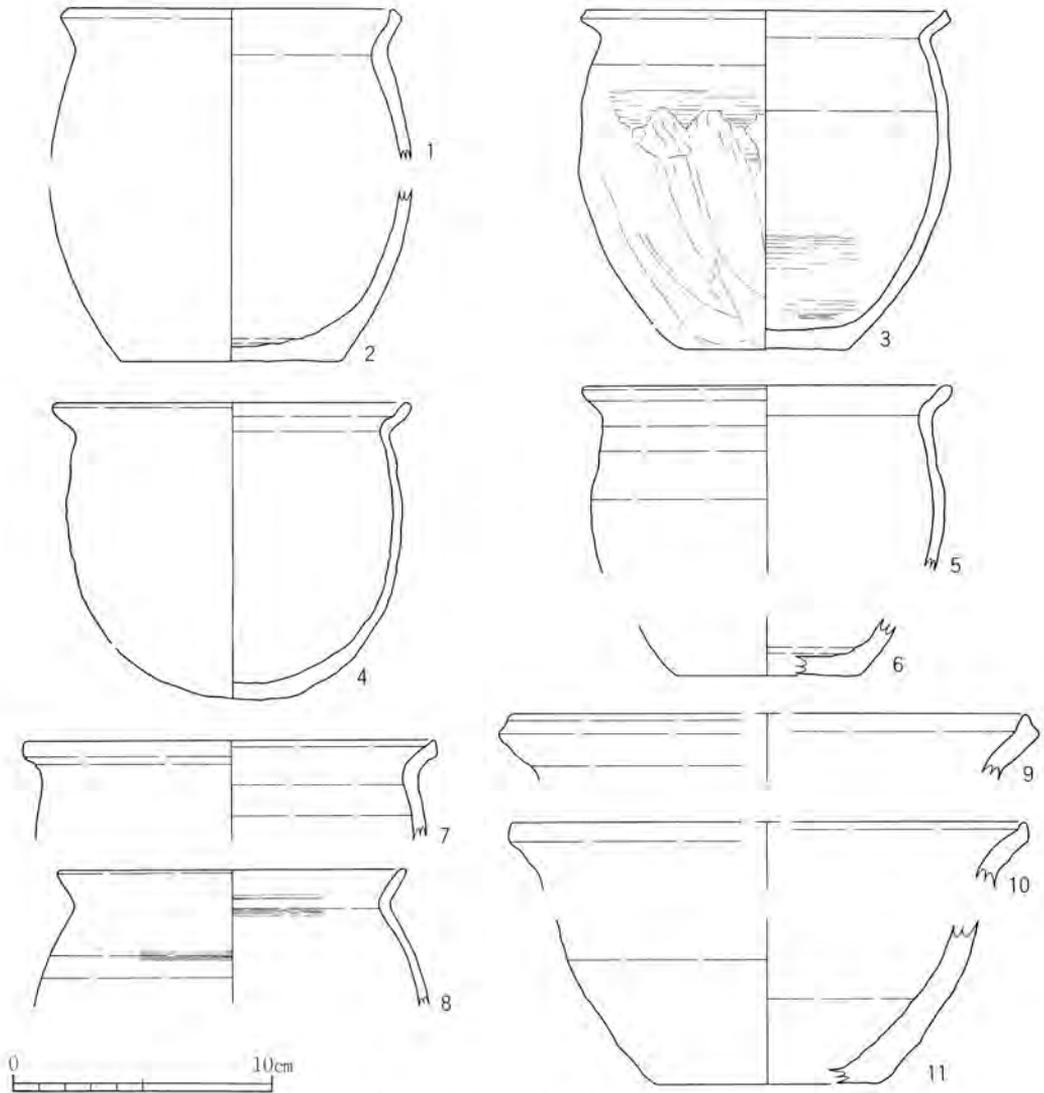
2Tでは地表から50~60cmの深さで包含層が検出される。層の上部は4層(近世後半以降)による攪乱のためかなりの凹凸がみられるが、厚さは30~80cmで、暗褐色~黒褐色を呈する砂質土である。竪穴住居は包含層を掘り込んで、一部地山まで達している。住居覆土となる5層からは十数点の須恵器・土師器とともに古式土師器が20点ほど出土しているが、それに切られる8層(包含層)からは古式土師器と縄文土器が出土している。この状況はすぐに包含層の時期的分層に言及できるものではないが、少なくとも8層は古墳時代以前の層として奈良~平安時代とは切り離せそうである。



第7図 2T断面土層図(1/60)



第8図 2T一括土器出土状況(1/20)



第9図 2T一括土器実測図(1/3)

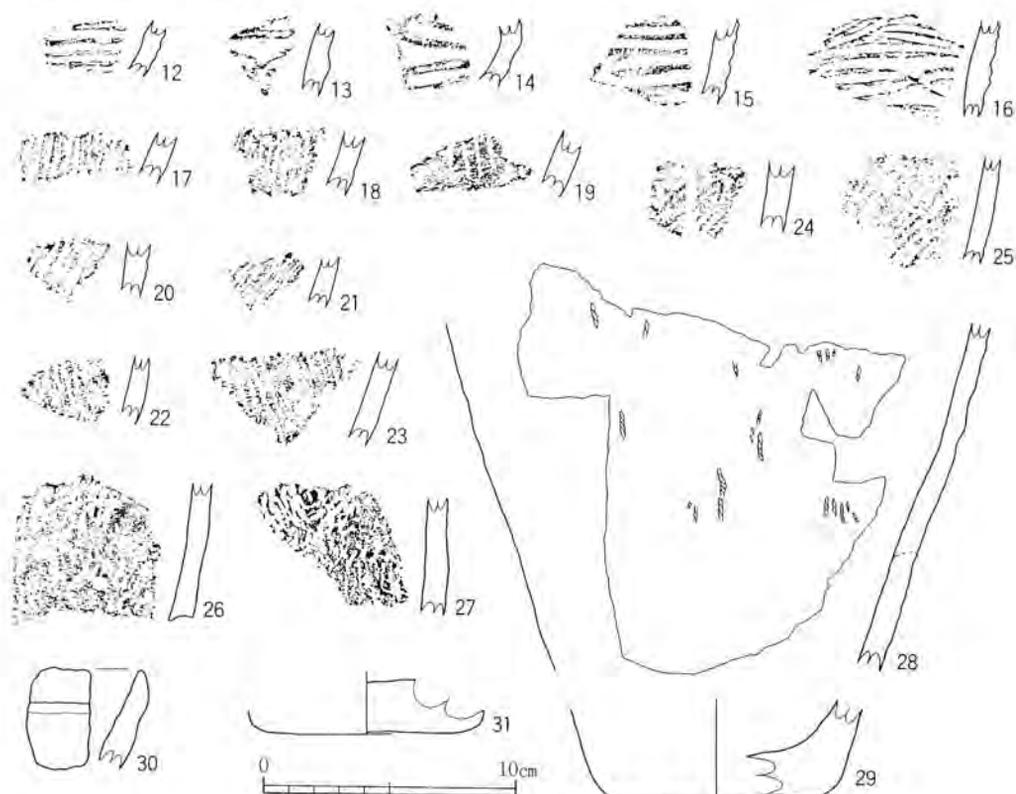
第9図は、第7図6層に相当する覆土より出土した一括土器(1-5・11)とその周辺から出土した土器(6-10)である。この一括土器はカマドを構成する材料(芯など)として使用されたと思われるものであり、熱を受けた明褐色あるいは淡褐色を呈している。1・2は同一個体である。器面は被熱による剝離をしているが、1にはかすかにカキ目が残る。3は体部外面がカキ目→ヘラケズリ、底部はナデ調整が行われている。4は丸底の小甕で摩耗が激しく成形・調整は不明であるが、器形の歪みから非ロクロの可能性はある。11もやはりカマドに関係あるものと思われる。全体の器形はつかみ切れないが、甕か鉢であろうか。胎土は特異で、大粒(2~3mm)の長石や砂が多量に入った粗雑な感じのするものである。成形はロクロによるもので

あり、底部は糸切りとなっている。6は小甕の底部。外面に指ナデのような跡がみられる。7・8は小甕で一括土器の小甕ほど被熱していない。7は口縁部内側に炭化物の付着がある。8は他の小甕より器壁が薄いもので、体部外面にはカキ目がみられる。9・10は長甕の口縁部。「く」の字状に外反するもので、端部が上方につまみあげられている。これらの土器は时期的な限定がむずかしく、山三賀編年のII～III期としておく。

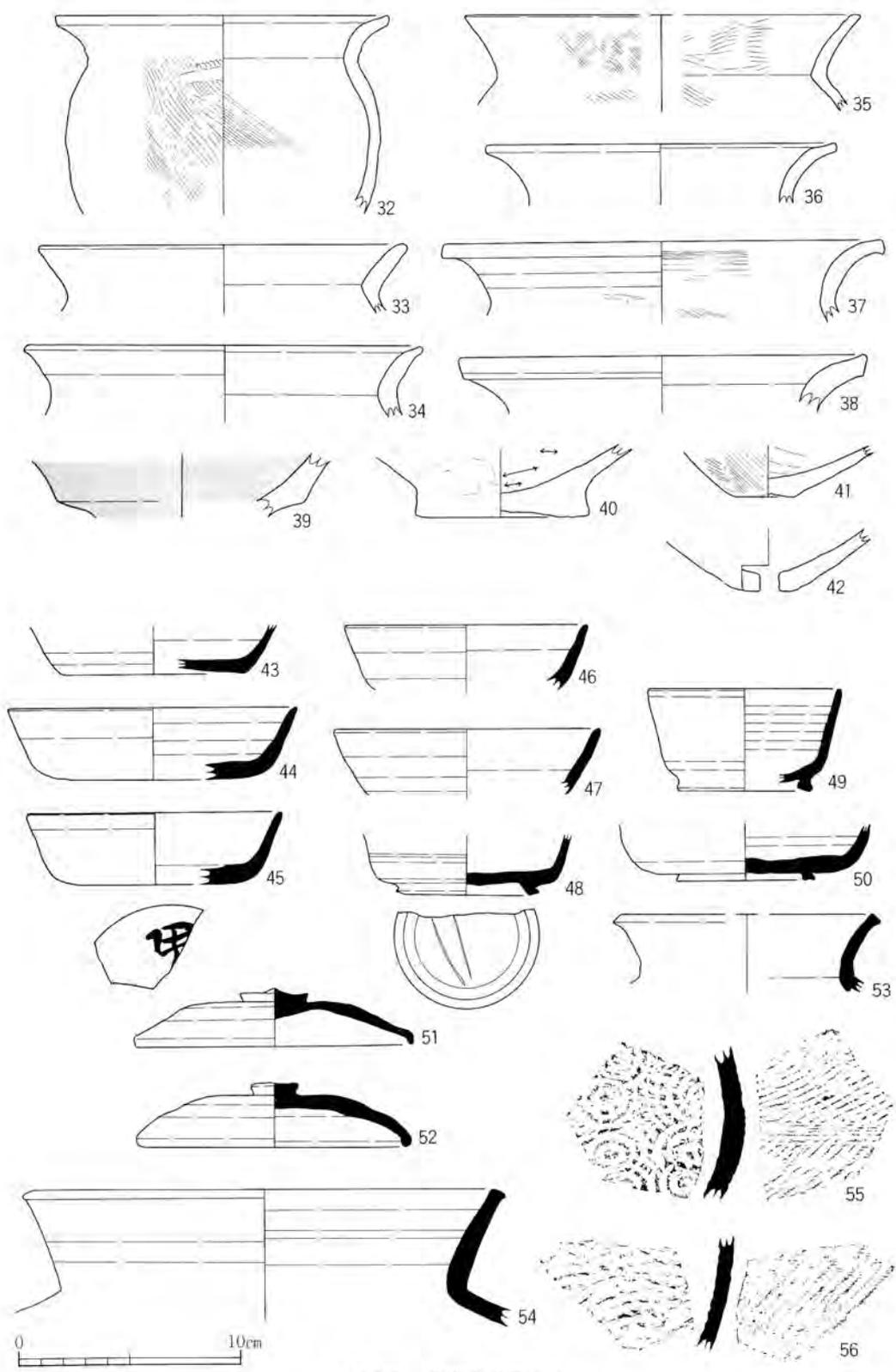
2. 縄文土器(第10図)

出土した縄文土器は20点ほどである。図示したもののうち、19(9T)・20(4T)以外は2Tから出土している。第7図の5層から出土している12～16は浮線網状文が施されたもの。施文後の調整はていねいに行われている。12の内面はミガキがていねいで、外面にはわずかに赤彩のあとがみられる。いずれも鉢か浅鉢であろう。17～23は燃糸文(R)が施されたものである。器面ミガキ後の施文である。24・25は縄文(LR)を地文とするもの。粗製の鉢か深鉢である。26～29は同一個体で、胴部にわずかに燃糸文(R)を残す粗製の深鉢である。8層から出土している。30はその口縁部の可能性がある。

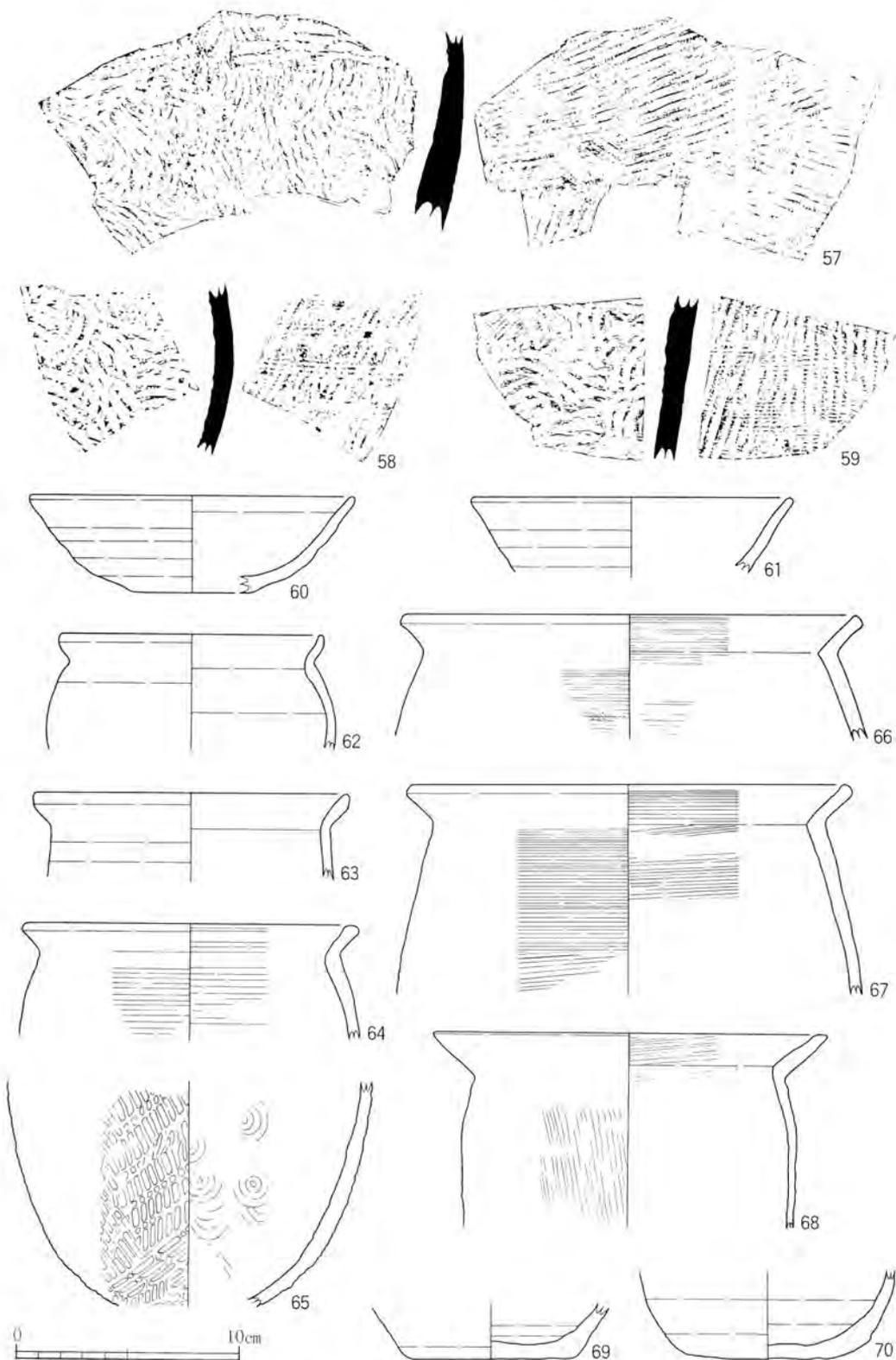
これらは縄文時代晩期後半に属するが、浮線網状文は大洞A式併行で、燃糸文は同時期あるいはそれよりやや古い時期に位置づけられるようである。



第10図 縄文土器実測図(1/3)



第11图 遺物実測図(1/3)



第12図 遺物実測図(1/3)

3. 古式土師器(第11図32~42)

出土した古式土師器は全部で1箱半である。そのほとんどが小片で、図示できたものは11点しかない。他の地点でもそうであるように、本地点においても甕類が多く、今回は9割ほどの量となっている。32~38は口縁部が「く」の字状または「コ」の字状に外反するタイプの甕で口縁端部に意識的に面をつくるもの(32・36~38)とそうでないもの(33~35)とがある。後者には35のような水平な面をもつものもあるが、この種は口縁部がハケ目調整されるものにとときどきみられ、端部調整の具合によってできるようである。口縁部はヨコナデ調整で体部はハケ目調整というものが多い。39は赤彩の高杯、40~42はそれぞれ壺・甕・有孔鉢の底部である。40の胎土は比較的混入物が少なく、体部内外面ともミガキが行われている。

4. 須恵器(第11図43~56・第12図57~59)

須恵器はテンバコ半箱ほどの出土がある。図示した器種の他に瓶か壺いずれかの破片もあった。今回出土した須恵器は大半が新津丘陵産で、その他は佐渡小泊産のものである。阿賀北産のものはみられない。第11図43~47は無台杯。43・47は佐渡小泊産のもので、ロクロ目が顕著である。44~46は焼成の具合であろうか、全体にやや白っぽく底部は肌色がかった色調である。45の底部外面には墨書があるが解読不明である。48~50は新津丘陵産の有台杯。48は身の浅いタイプで高台内側に2本線の刻書がみられる。49は小型で深身のもの。50は口径が48よりやや大きくなるが、身の浅いタイプで、高台はかなり内側についている。51・52は杯蓋。51は天井部にヘラケズリのあとを残すが、52は軽いナデ調整を行っている。53は甕か横瓶の口縁部。第12図59は甕類破片であり、第11図54・56・第12図58の外面には自然釉がかかっている。

5. 土師器(第12図60~69)

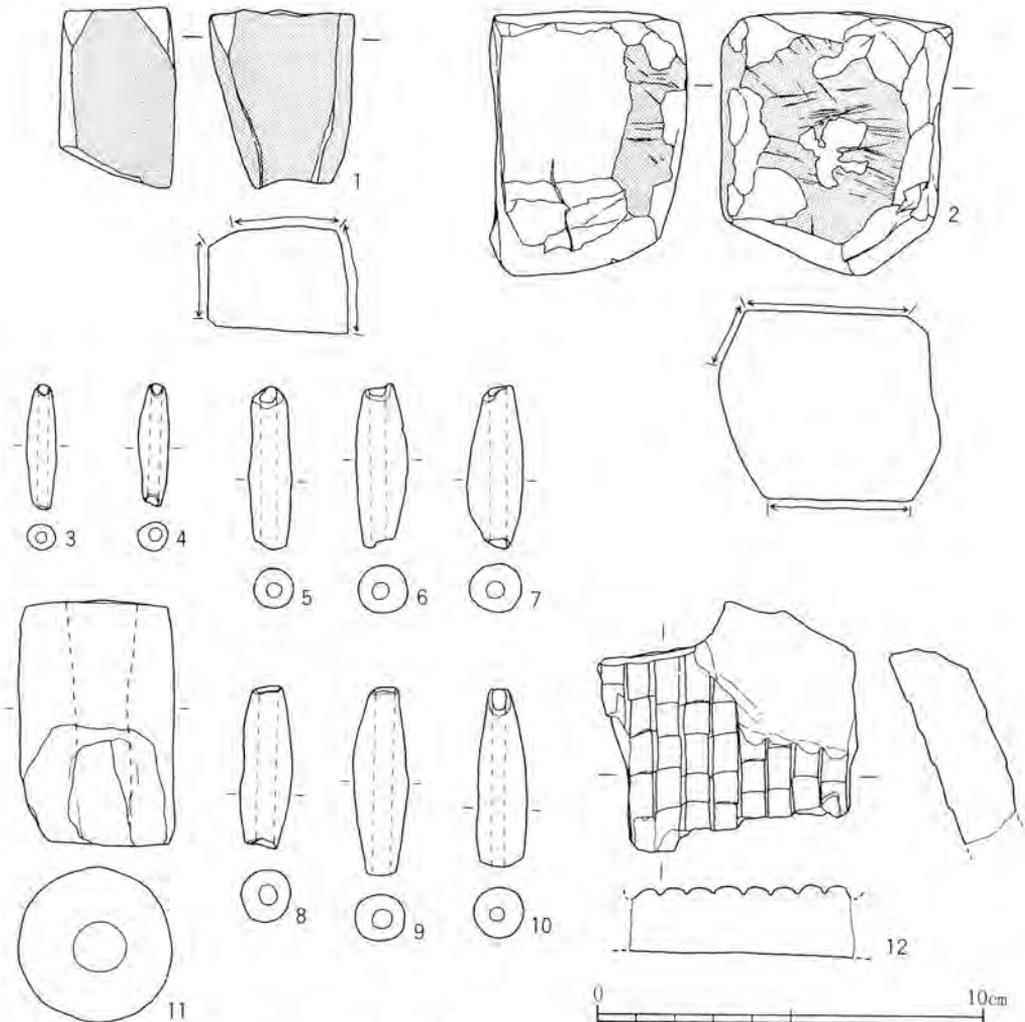
土師器の出土量はテンバコ半箱ほどである。器種は椀・小甕・長甕の3種類である。60・61は同一個体かもしれない。内面はナデによってていねいな仕上げをしているが、60の底部外面に糸切りのあとが残っている。体部外面にはススの付着がみられる。62~64は小甕。64は62・63に比べて器壁が厚く、ナデ・カキ目などの調整痕も顕著である。66~68は長甕。66・67は口縁部が「く」の字状に外反し、端部は面をもつが丸味をおびておさまっている。68はロクロ土師器の平底のものである。胎土は砂っぽさが目立つが、器壁は薄く内面のナデ調整も比較的ていねいである。体部外面にはタテ方向の、また口縁部内面にはヨコ(ナナメ?)方向のハケ目がみられる。70は68の底部と思われるものである。体部にロクロ目を一部残している。底部外面は無調整に近い粗いナデが行われている。65は長甕の底部で、タタキ目をよく残すものである。胎土は精緻で、焼成はかなり硬質である。

6. その他の出土遺物(第13図)

砥石(1・2) 1は4T、2は6Tから出土している。石材は凝灰岩と思われるもので、どちらも砥石用に調整されたものである。1は80gで、2は302gである。2には顕著な擦痕がみられる。

土錘(3-11) 3-10は小型管状形の土製品で、中央部がやや膨らむ。器面には成形時の指の圧痕が残るものもある。3・4はかなりの小型で長さ3cmほどのものである。胎土は赤褐色を呈している。11は円筒形の土錘である。胎土は石英・長石・砂粒が多く含まれている。

瓦塔(12) 屋根部の破片である。竹管状工具によって描き出されており、方形軸部の角と接する面が残存している。砂粒を含んだ胎土であり、灰黒色と淡褐色が混じるやや軟質な焼成となっている。昭和56年調査でも出土(4点)しているが、同一個体の可能性がある。



第13図 石製品・土製品実測図(1/2)

VI ま と め

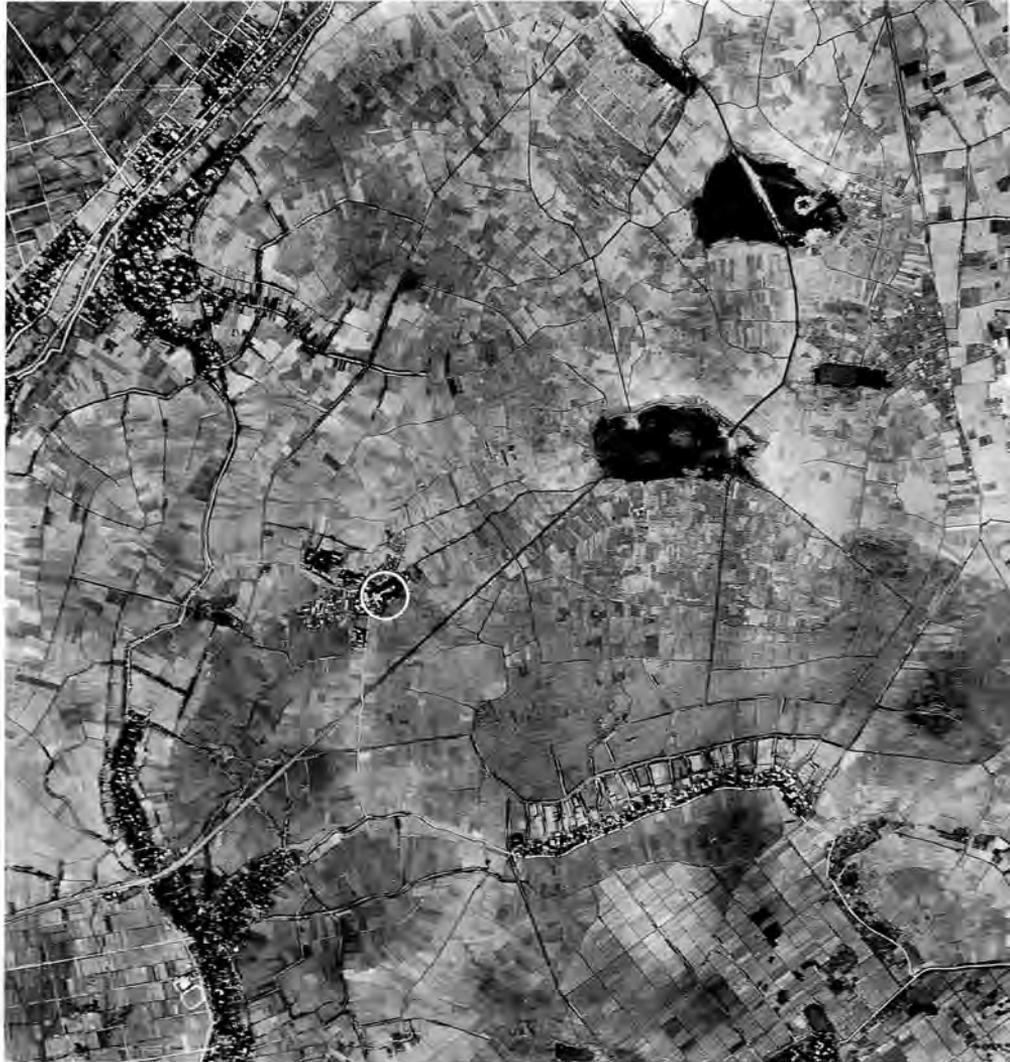
今回の調査では、遺跡の範囲を把握することに主眼をおき、10本のトレンチをいれたが、未知であった情報を得ることができた。そのいくつかを述べる。

層序について この調査では墳丘部分はずれた縁辺部を中心にトレンチを設定している。1T(包含層が確認されなかった)と2T(遺構確認)を除いた各トレンチの層序は、ほぼ同じ様相を示しており、基本的には地山直上の包含層とその上の盛土・自然堆積層という状況がみられた。また包含層からは同レベルで古式土師器・須恵器・土師器が出土し、同じような包含層をもつ緒立C遺跡へそのままつなげていく可能性もみえてきた。しかしこの層序のどこに葺石下の盛土が対応するのかわからない。今回確認された包含層と地山の間に入ってくるのかもしれない。地山は、縁辺部に向かって比較的ゆるやかな傾斜で落ちていき、神社地を過ぎたあたりからその傾斜が増してくるようである。地山の地形をみると、古墳は標高の高い地点の中央よりはやや端寄りに築造しているようである。端寄りのほうが古墳の高さが強調されるのかもしれない。

遺構について カマドをもつ竪穴住居が2Tで確認された。この住居もそうであるが、緒立遺跡で検出される奈良～平安時代の遺構は、黒褐色土(包含層)のなかにプランがおさまることが多い。ここではカマドの材料と思われる小甕が出土している。2個体重ねにして袖にしたようにも思われるが、その構造ははっきりしない。緒立遺跡では奈良～平安時代の住居があまり明確ではなく、貴重な資料である。

遺物について ここでは縄文土器と瓦塔について触れる。今回の出土した縄文土器の主体は大洞A式に併行するものである。これは昭和56年の調査での大洞C₂式併行のものが主体という様相とはやや異なった結果であった。しかしそれらは出土地点にも違いがあり、両者のあいだには40～50mの距離がある。当時の移動の跡をみるようで、興味深い。瓦塔は県下でも上越市・今池遺跡と佐渡・小泊窯跡群の類例しかみないものであるが、それが出土する遺跡は全国的にみても限られており、寺院・官衙・富豪層といったものがあげられる。平成元・2年の緒立C遺跡の調査から、本遺跡は新潟市の場遺跡とあわせて、官衙的な役割をもつ要地と考えており、瓦塔はそれを裏付けるものでもあろう。

以上、今回の調査についてかいつまんで述べた。調査するたびに重要性の認識が深まっていく遺跡である。今後は保存・整備を考えた調査をしていく必要がある。



昭和20年代の遺跡周辺
(建設省国土地理院保有写真)



昭和50年代後半の遺跡周辺
(緒立七地区画整理組合資料)



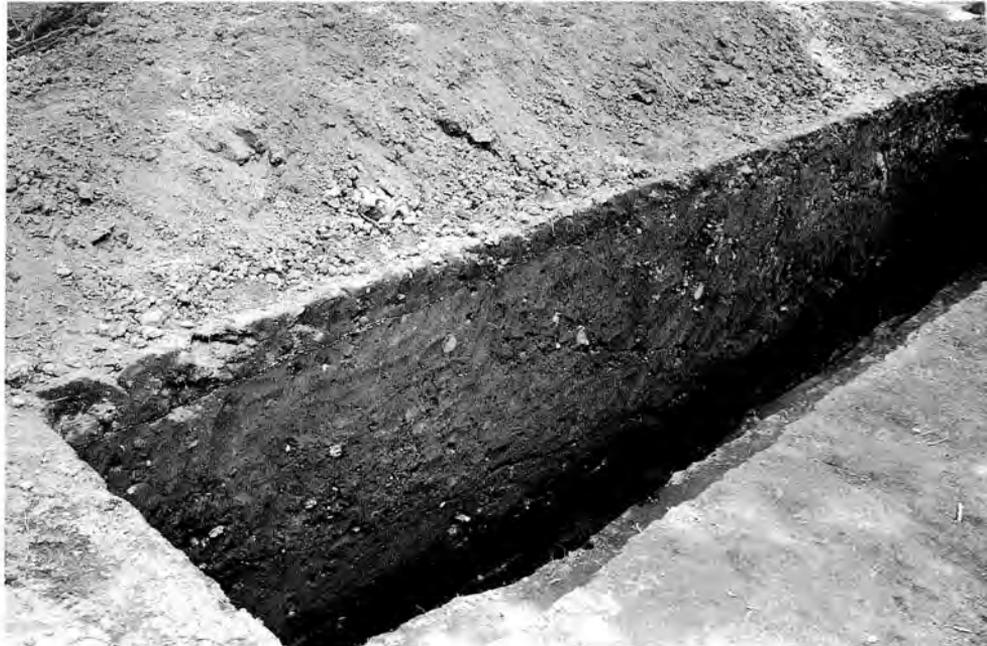
遺跡遠景(北東より)



遺跡近景



2 T 土器出土状況



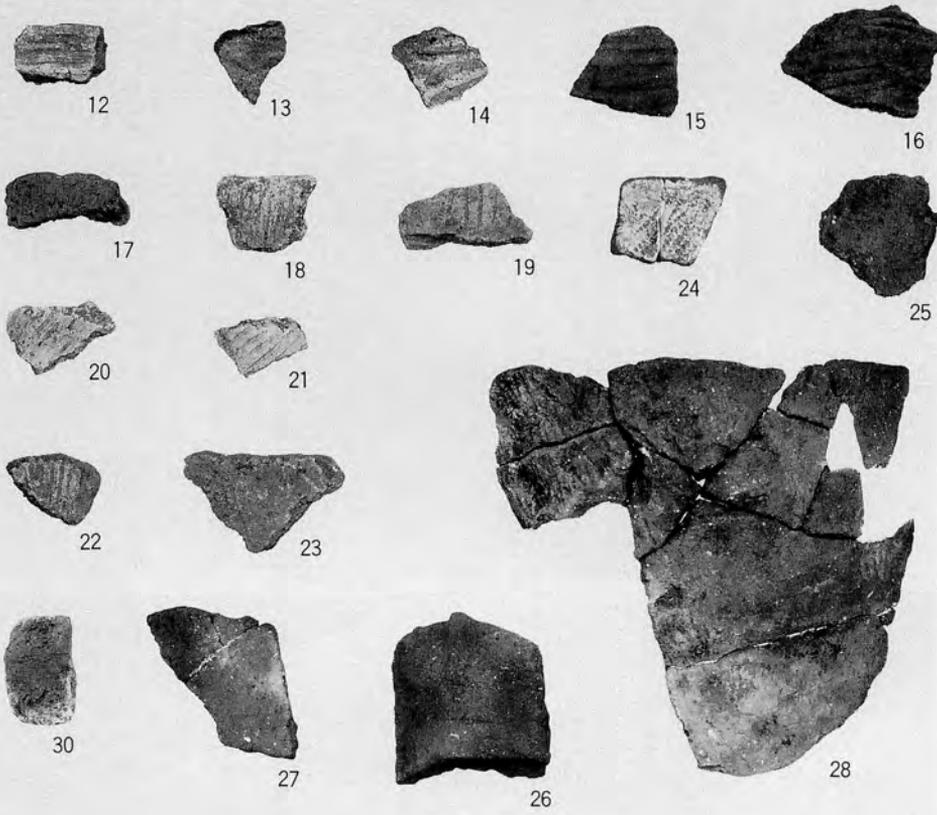
3 T



5 T



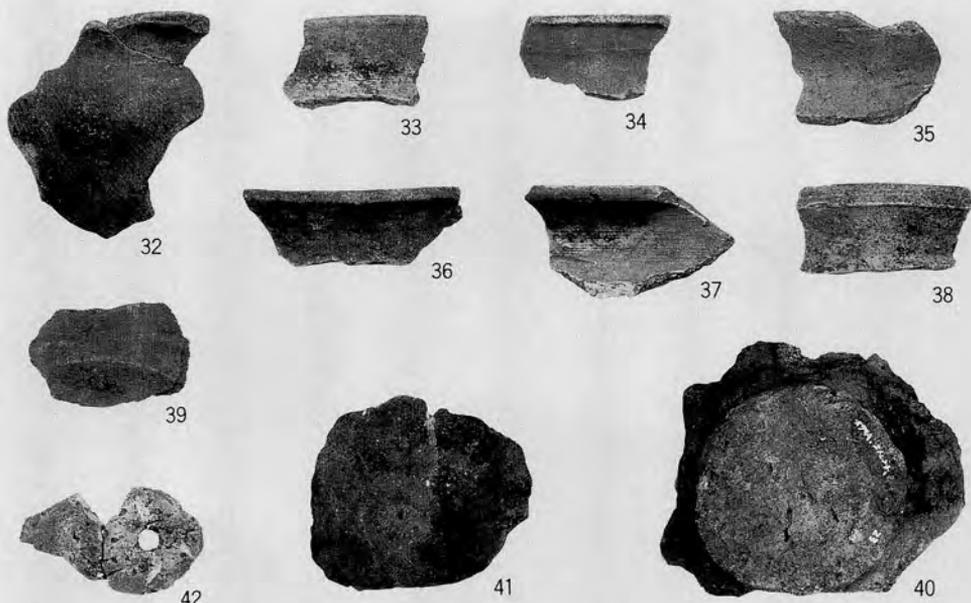
10 T



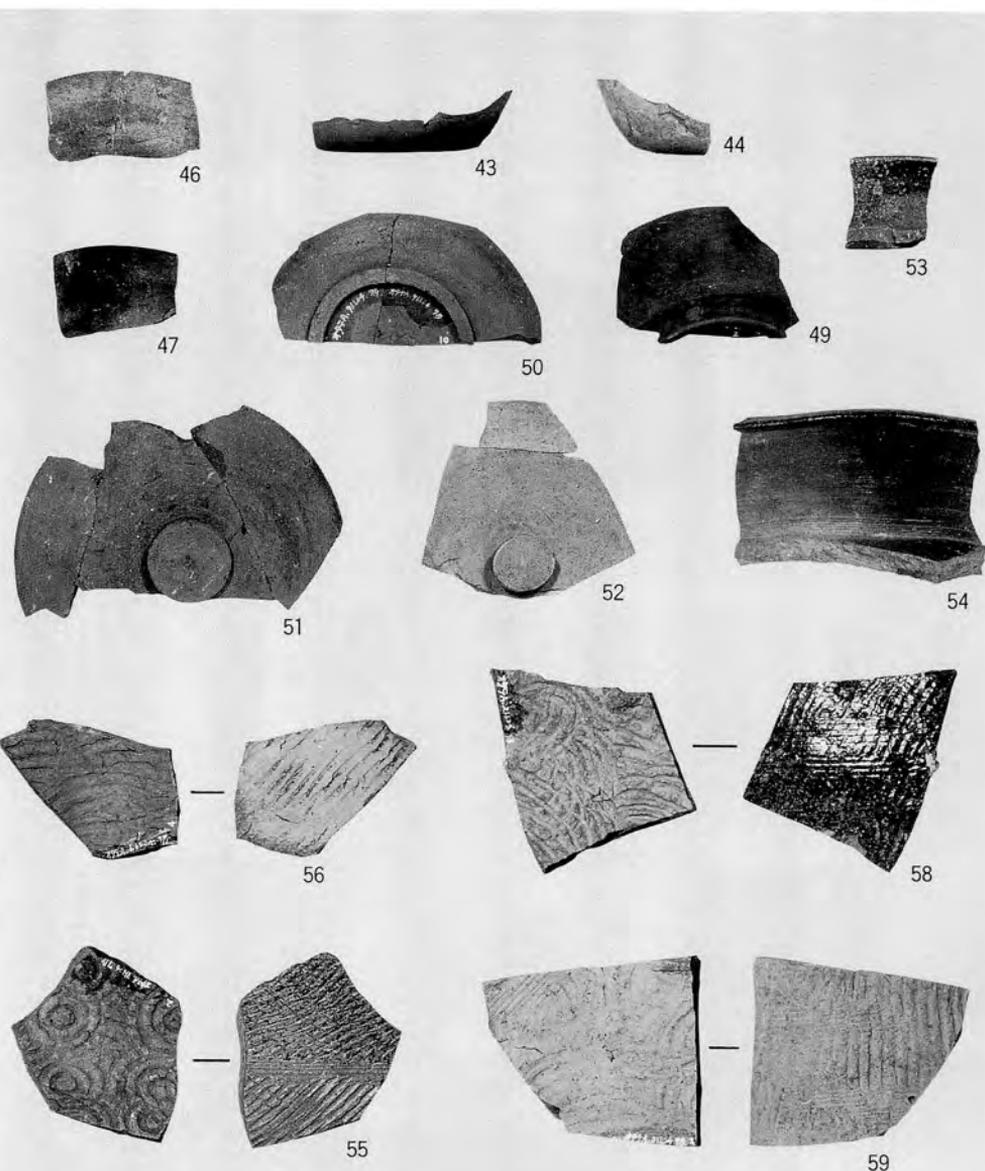
縄文土器(1:3)



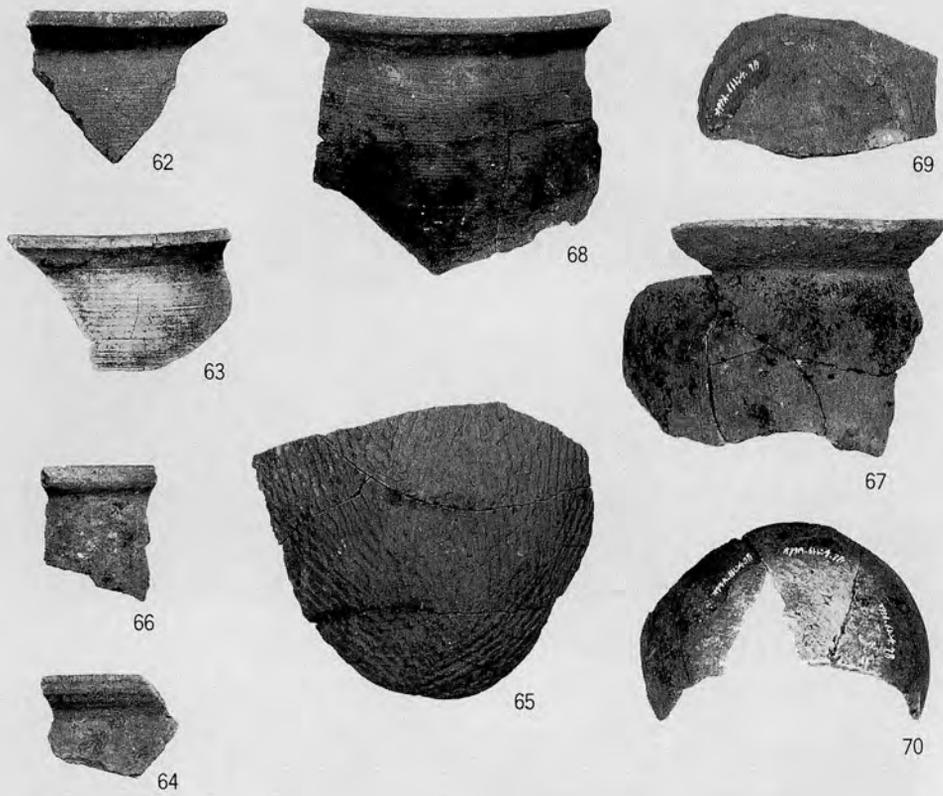
2T一括出土遺物(1:3)



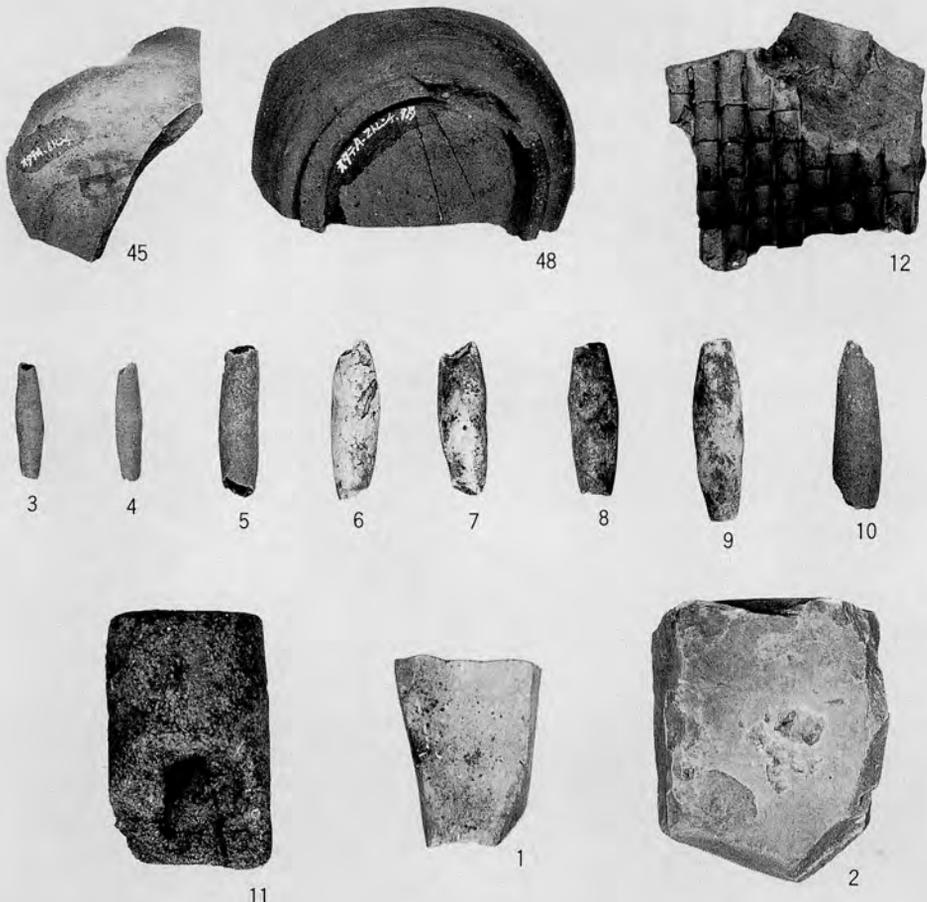
古式土師器(1:3)



須恵器(1:3)



土師器(1:3)



その他の遺物(1:2)

- 墨書土器(45)
- 刻書土器(48)
- 瓦塔(12)
- 土錘(3~11)
- 砥石(1・2)

調 査 体 制

調 査 主 体 黒埼町教育委員会(教育長 青木昭平)
調 査 担 当 渡邊ますみ(黒埼町教育委員会社会教育課主事)
事 務 局 青木正夫(黒埼町教育委員会社会教育課係長)
調 査 指 導 新潟県教育庁文化行政課
調 査 補 助 員 戸根富美江
調 査 作 業 青木市太郎・保苺優子・山際知一郎・山際 司・山際寅夫・山際六蔵・布川忠一
整 理 作 業 山際 静
調 査 協 力 青池光子・朝妻文子・青木 宏・春日真実・川村浩司・坂井秀弥・鈴木俊成・戸根与八郎・
山際藤吉・渡邊朋和・石 附 組・緒立土地地区理整理組合・黒鳥自治会・総合都市開発

引 用 ・ 参 考 文 献

小池邦明・藤塚 明・本間桂吉 1991 「2.の場遺跡発掘概要」『1989年度埋蔵文化財発掘調査報告書』
新潟市教育委員会
小池邦明・本間桂吉 1992 「3.の場遺跡発掘概要」『1990年度埋蔵文化財発掘調査報告書』 新潟市教
育委員会
北村 亮^{ほか} 1983 『緒立遺跡発掘調査報告書』 黒埼町教育委員会
坂井秀弥^{ほか} 1989 『山三賀II遺跡』 新潟県教育委員会
高崎光司 1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』第74巻第3号
戸根与八郎 1984 「III章 3.遺物 A.奈良・平安時代 5)瓦塔」『今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』
新潟県教育委員会
永峯光一^{ほか} 1982 『緒立八幡神社古墳』 黒埼町教育委員会

緒立 A 遺跡確認調査報告書

1 9 9 3 . 3

発 行 黒埼町教育委員会
新潟県西蒲原郡黒埼町大野2843-1
〒950-11 TEL (025)377-3101

印 刷 長谷川印刷
新潟県新潟市小針1丁目11-8
〒950-21 TEL (025)233-0321